

悲しみもまた私のもの



悲しみに沈んだ人がいる。その人を見るに
みかねて助けたいという人が現れる。「どん
な悲しみがあるか知らないけれども、時が解
決してくれるものだよ」とか、「物事は考え

ようだよ。この美しい青空を見てごらんよ」
と言葉をかけて励ますのだが、悲しみに沈ん
だ人は、いつこうに耳を傾ける様子はない。
そして「私の悲しみも私の一部なのです。私
が私の悲しみと向かいあつてすごしている静
かな時間を乱さないでください」と言う。

悲しみにある人が、しばらくそうしている
と、今度は「心を癒すことが仕事だ」という
人々が現れる。そして、こうすれば悲しみを
乗り越えられるという方法を教えようとす
る。彼らが示すのは「悲しみからの回復」で
ある。どうやらそこには段階があるらしい。
彼らが言う通りにすれば、階段を一步一步の
ぼるように、悲しみから回復できるのだとい
う。

しかし、悲しみにある人は、それは登れる
ような階段ではないことを知っている。深い
穴の中なのか、高い山の頂上のようなところ
なのかはわからないが、身動きできないこと
は確かなのである。

好評のエッセイ

岡 知史著

知らされない
愛について

700円

ほんの少しの
神に近い部分

700円

愛する我が子を自死で亡くした親たちの気
持ちは、きつとそのようなものだろうと私は
想像している。その悲しみは時が解決してく
れるものでもなく、「時がたつにつれて、ま
すます深まっていく悲しみがある」と、息子
を亡くしたお母さんは私に語っていた。

癒されうる悲しみがある一方で、どうして
も癒されない悲しみがある。一人娘を自死で
喪つたお父さんは「私は遺族ケアとか支援と
かという言葉は嫌いなのです。(私の悲しみ
は)ケアされようがない、支援されようがな

いのです」と語っていた。

現在、自死遺族のケアの必要性が多くの専門家によって指摘され、法律も行政がそれに取り組みように指し示している。しかし、そこには「ケアされようがないほどの深い悲しみがある」という可能性は考えられていない。「どんな悲しみでもケアによって軽減される」と誰かが経験的に証明したとでもいうのだろうか。

唐突だが、私はここで「障害もまた私の個性である」と身体障害者たちが主張し始めたころの、医療・福祉関係者の戸惑いを思い出すのである。障害者にかかわる「専門家」の使命は「障害を無くすこと。無くせなくても軽減させること」であった。だから「障害も私も一部だ」と障害者たちが言い始めたとき、「専門家」は自らの専門性を否定されたようにも感じたに違いない。

たしかにリハビリテーションや手術によって軽減され、あるいは無くなる障害もある。しかし、そうではないものもある。無くならない障害を正面から受け入れ、それをかけがえのない自らの一部として組み入れたとき、

社会を大きく動かす障害者運動が始まったのである。

自死遺族の市民運動も「悲しみは私たちの」と高らかに宣言するとき、力強い一歩が始まるのかもしれない。訓練で身につけた技法や頭で覚えた理論など、人間が後で身につけたもので、人生の最も深淵な死の悼みを救えるはずがない。それを認めたいか認めたくないかにかかわらず、ダチヨウが空を飛べないように、蝶が水中を泳げないように、遺族ケアはある人々の前には無力であることは否定できないのではないか。生死の根源の苦しみを自ら体験した者だけがもつ威厳に、「専門家」は沈黙するしかない。それを「救える」と考えること自体がおこがましいのだ。

「障害も個性の一つ」という考えは、社会的に広がっている。それでもリハビリや医療の重要性は誰も疑ってはいない。両者は共存できるのである。遺族ケアも「悲しみは私たちのもの」という遺族の主張を認め、それを前提としたときにこそ新しい段階に進むのだろう。

(知)

絵がうたうー

絵とうたうー

童謡♪絵はがき

- ・春 ・海
- ・夏 ・花Ⅰ
- ・秋 ・花Ⅱ
- ・冬Ⅰ ・子ども
- ・冬Ⅱ ・雨
- ・汽車 ・川
- ・5月 ・母
- ・お正月 ・虫

もらった人も、思わず、歌いたくなる、うれしい、楽しい「絵はがき」

童謡♪絵はがき

■5枚1組 ¥180